

# 農産物・食品の輸出制限的措置による世界の食料需給・貿易構造及びフード・セキュリティへの影響に関する研究



(宮城大学委託分野)

## ② 米国の輸出制限的措置が食料需給と貿易構造に与えた影響

2026年5月12日

宮城大学 三石誠司

# 背景と研究目的

## (背景)

- 世界の穀物需給環境の変化
- 主要輸出国としての米国の影響力の大きさ
- 日本の輸入依存構造
- 視点 ➡ 輸出制限的措置 ➡ **関税・経済安全保障の重要性増大**



## (研究目的)

- 米国の輸出制限的措置の分析
- 政策的含意の整理
- 関税政策の変化を含めた総合評価
- 食料需給・貿易構造への影響

# 研究の全体構成（3年間）

- 初年度： 輸出制限的措置の性格と発動要因
- 2年度： トウモロコシの分析
- 3年度： 関税政策と貿易政策
- 段階的アプローチ

# 初年度（2023年度）の成果

- 関係資料の収集と米国の輸出制限的措置に関する包括的レビューの実施

- 結果： 3つのポイントが明確化

1) 経済的観点（潜在的ビジネス・市場影響力維持の可能性）重視  
（需給ひっ迫だけが理由ではない）

2) 農産物 = 戦略品目としてのトウモロコシの考え方 → 2024年度への力点

3) 複層的な見方の重視（エネルギー安全保障・環境・国内農業）

## 成果

- 「米国から見た中国と日本－穀物・食肉の輸出先として」、『Agrio』、0486号、5頁、2024年1月。
- 「『食肉』と『コメ』の安全保障」、『生物工学会誌』、第101巻、第12号、643頁、2023年12月
- 「過去の教訓から将来を考える－中国のアフリカ豚熱（ASF）から我々は何を学ぶか」、『養豚情報』、2024年1月、12-16頁
- 小泉達治・三石誠司「座長解題/リスク・不確実性が増大する世界食料市場とフードシステム-食料の安定的な調達に向けて」、『フードシステム研究』、第30巻、3号、12-133頁
- McBride他、「新ミレニアムにおける米国のコメ生産－構造変化・実践・コスト」、三石誠司：翻訳・解題、『のびゆく農業－世界の農政』、1061-1062号、2024年1月

# 2年度（2024年度）の成果

- 対象：戦略品目としての米国産トウモロコシの活用と展開
- 結果：構造変化と戦略的行動の明確化
  - 1) ロシアは小麦で首位になるも、米国はトウモロコシの優位性を維持（ウクライナは後退）
  - 2) 米国は輸出制限も新規顧客開拓もしない（= 既存顧客重視と信頼性の維持）
    - ➡ 指摘持ち越し課題：輸出制限的措置発動時における意思決定の重要アクターの分析
  - 3) 農業生産は振興：国内は余剰吸収メカニズム構築（新産業の構築➡バイオエタノールでの活用）
  - 4) ブラジルと中国の存在を意識しつつ緩やかな撤退と多面的対応
  - 5) 日本のコメへのインプリケーション

## 成果

- 「食料安全保障：何を守り、どう残すか」、『論究』、第21号、2024年12月、11-24頁
- 本間他、『アルコールで走る車が地球を救う』、第4章『コメ』と『トウモロコシ』の潜在力、2024年10月、176-226頁
- 「米トウモロコシ需要における主役交代の背景：飼料原料からエタノールへ」、『Agrio』、第515号、2-3頁
- 「ロシアによるウクライナ侵攻がもたらした世界の穀物調達状況の変化－小麦とトウモロコシを中心に」、『農業と経済』、2024年5月、125-134頁
- 「フード・セキュリティ：世界はどう考え動いているか」、『Agrio』、第500号、4-5頁
- Ramsey他、『2030年の世界の燃料用エタノール』、三石誠司：翻訳・解題『Global Demand for Fuel Ethanol Through 2030』、USDA-ERS、February 2030.（2025年3月）

# 3年度（2025年度）の成果

- 分析枠組みの応用

- 結果： **構造変化と戦略的行動の明確化**

- 1) 関税は新たな市場攪乱要因

- 2) 米中摩擦 → 貿易構造変化

中国：輸入先多角化、 米国：輸出先再編

日本を含む第三国市場への影響

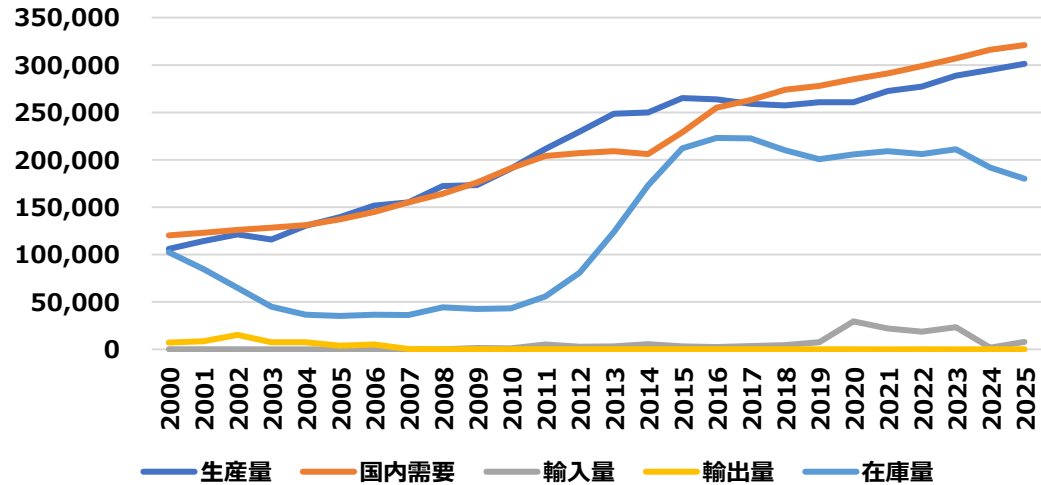
- 3) **長期・構造的影響**

## 成果

- “U.S. Tariff Policy and Its Impacts on Japanese Agriculture”, FFTC Agricultural Policy Platform (FFTC-AP), Food and Fertilizer technology Center for the Asian and Pacific Region. <https://ap.fftc.org.tw/article/3904>
- 「鶏肉とエビで明暗、タイの対日輸出」, Agrio 584号, 2026年2月
- 「中国の牛肉輸入と日本－各国が狙う、急拡大した市場」, Agrio 573号, 2025年11月
- 「米中が繰り広げる『超限戦』－農業・食料分野、そして日本への影響は」, Agrio 550号, 2025年5月
- 『世界の農業生産・資源活用・生産性：1960-2000』, 『のびゆく農業』, (2026年3月31日予定)

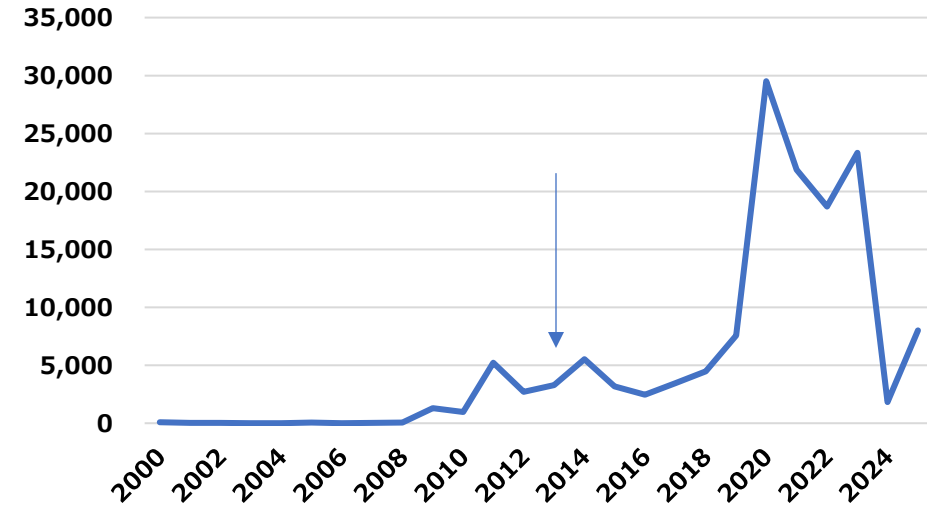
# 中国のトウモロコシ輸入の変化

中国のトウモロコシの長期需給  
(2000-2025年、単位：千トン)



出典：USDA PS&Dより作成

中国のトウモロコシの輸入量  
単位：千トン



出典：USDA PS&Dより作成

- 2013年までは米国から少量を輸入  
(注：「一帯一路」政策の表明は2013年)

- 2014年以降はウクライナが中心

- 2020年以降は米国が回復 + ウクライナ

- 2022年末に中国とブラジルで植物検疫プロトコールが正式締結 (ブラジル産cornが輸入可能に)

- 2023年にブラジル産輸入を正式解禁 (⇒市場アクセスが「価格」ではなく「制度」で決まる典型例)

- 2024年は複合ショック (国内増産、需要減少、輸入抑制、前年の反動、ブラジル増産で国際価格低下)

- 2025年も制度上はブラジルが主力、米国も少量

2021年：米国1900万トン、ウクライナ800万トン

2023年：ブラジル1190万トン、米国710万トン、ウクライナ550万トン、

2024年：ブラジル350万トン、米国25万トン、ウクライナ10万トン、その他

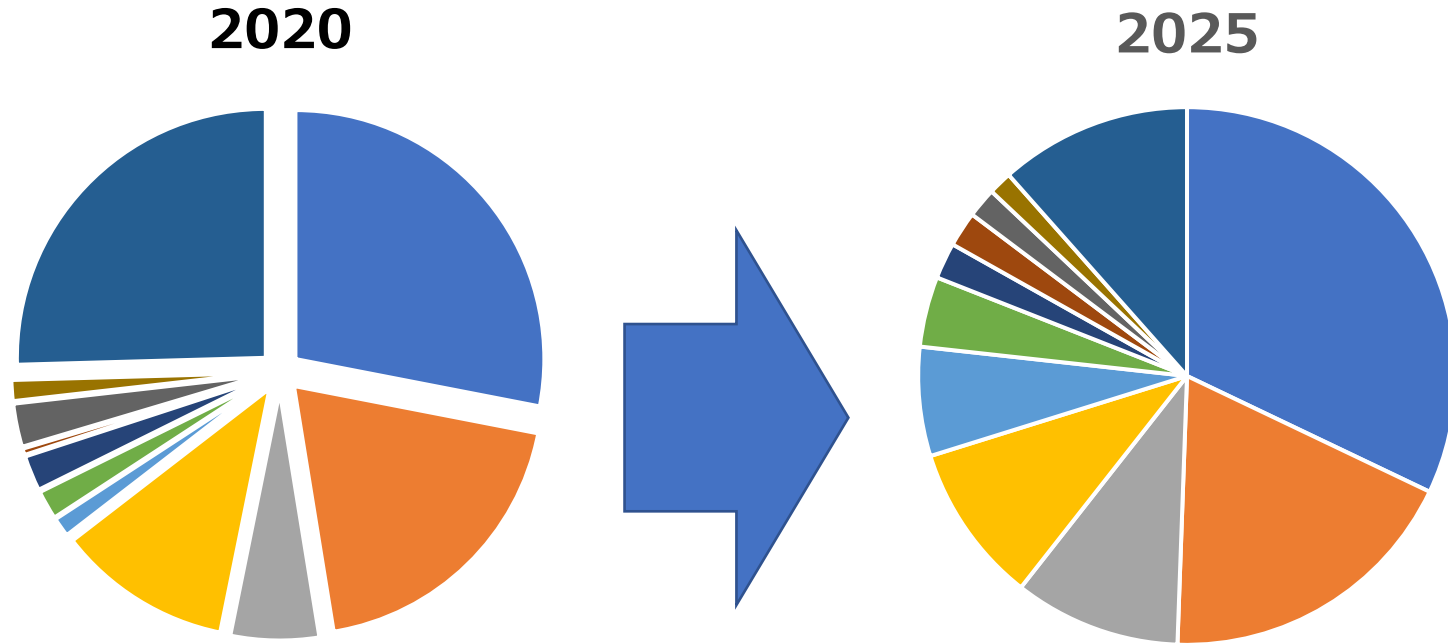
2025年：ブラジル190万トン、米国60万トン、ウクライナ15万トン、その他100万トン？

(ロシア、ミャンマー、東欧など) いずれも筆者の推定値

# 米国のトウモロコシ輸出の変化

米国のトウモロコシ輸出金額（\$ Bil）

	2020	2025
メキシコ	2.69	5.92
日本	1.86	3.41
韓国	0.55	1.85
コロンビア	1.09	1.77
EU	0.12	1.21
台湾	0.18	0.78
グアテマラ	0.22	0.4
ベトナム	0.04	0.39
カナダ	0.27	0.33
ホンジュラス	0.13	0.26
その他	2.44	2.13
合計	9.59	18.45



■ メキシコ ■ 日本 ■ 韓国 ■ コロンビア ■ EU ■ 台湾  
 ■ グアテマラ ■ ベトナム ■ カナダ ■ ホンジュラス ■ その他

■ メキシコ ■ 日本 ■ 韓国 ■ コロンビア ■ EU ■ 台湾  
 ■ グアテマラ ■ ベトナム ■ カナダ ■ ホンジュラス ■ その他

出典：USDA PS&Dより作成

- ・金額ベースで見た場合、メキシコ、日本の1位2位は変わらず
- ・韓国以下の**既存顧客のウエイトが少しずつ上昇**
- ・「その他」は、金額的には変わらないが、ウエイトとしては半減

# 総合的な結論

- 政権により**政策手段は変化**
  - 輸出制限的措置 → 関税など
- しかし、米国の**目的は長期的に一貫**
  - 需給安定
  - 競争力維持
  - 国際的な影響力確保
- **市場再編・構造変化を引き起こす点は共通**

# 政策研究への示唆

- 米国は保護主義的な政策を戦略的に進めているため、日本も同盟関係のメリットを活用しつつ、輸入依存を戦略的に低減する必要
  - ➡ **多角的な調達構造**を検討
- 国内サプライ・チェーンの強靱化と自給力向上
- **「食料×エネルギー」の統合政策の必要性**
  - ➡ とくに肥料や重要農産物の供給安定化対策の強化
- 米国との戦略的協調と国内自律性のバランス
  - ➡ 日本側の主体性・競争力を損なわない交渉戦略
- 貿易・通商政策の変化はリスクであると同時に機会として活用
  - ➡ 新たな市場（地域・機能・協定）や技術（デジタル・省資源・代替）への戦略的な対応

# 今後の課題

- 政策決定のアクター分析（昨年度から想定） ➡ 継続課題
- 個別品目の詳細分析
- **日本の政策対応の実証分析**

ご清聴ありがとうございました！